



PLAZA FESTIVAL 2019

Collective P

—まちとプラザをつなぐ搬入プロジェクト—

FESTIVAL

2019

Collective P

会期 2019年10月3日(木)～14日(月・祝)

会場 SCARTSスタジオ、SCARTSモールC、市内各所

入場料 無料

主催 札幌文化芸術交流センター SCARTS、札幌市民交流プラザ(いずれも札幌市芸術文化財団)

協力 札幌市交通局、札幌都市開発公社、積水化成工業株式会社

後援 札幌市、札幌市教育委員会

助成 文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)、
独立行政法人日本芸術振興会

企画・制作 五十嵐淳(五十嵐淳建築設計事務所)
酒井秀治(まちづくりプランナー/株式会社SS計画代表取締役)
岩田拓朗(札幌文化芸術交流センター SCARTS テクニカルディレクター)

制作アシスタント 高見堂風花(五十嵐淳建築設計事務所)、樋口瑞希(五十嵐淳建築設計事務所)

コーディネーター 小山冴子、矢倉あゆみ(いずれも札幌文化芸術交流センター SCARTS)

テクニカルスタッフ 神坂知春、福津圭佑(いずれも札幌文化芸術交流センター SCARTS)

宣伝美術 ワビサビ

映像撮影 モンマユウスケ、大塚黒

写真撮影 リョウイチ・カワジリ

スペシャルサンクス 参加市民の皆さん、悪魔のしるし

まちを通って、パーツを運び、ひとつの作品へ

札幌市民交流プラザの開館1周年記念イベント「PLAZA FESTIVAL 2019」のプログラムとして、市民参加型アートプロジェクト「Collective P —まちとプラザをつなぐ搬入プロジェクト—」を開催しました。パフォーマンス集団「悪魔のしるし」が考案した「搬入プロジェクト」をベースに、札幌オリジナル版として内容を検討したこのプロジェクトでは、一般公募で集まった約30名の参加者と共に、地下鉄や市電、地下街などを使ってまちなかを通過しながら、さまざまな形をしたパーツをプラザまで搬入し、巨大な岩山のような物体をつくり上げました。完成した物体は、人々が集い自由に憩える居場所として開放され、子どもたちの遊び場になったり、ランチタイムの休憩場所になったり、高校生の読書空間になったりと、思い思いの方法で親しまれました。まちを舞台にし、各所の協力を得ながら市民と共に展開したこのプロジェクトは、開館1周年を迎えるSCARTSにとっても大きなチャレンジとなりました。



「新さっぽろ駅」解体したパーツを持って改札を通り、地下鉄へ



「地下鉄東西線」地下鉄に乗って大通駅へ向かう

〈スケジュール〉

10月3日(木)

駅でパーツを公開制作

参加者と共に、地下鉄駅の構内でパーツを公開制作
長辺2mのスタイロフォーム※を、電熱線でいろいろな形に加工

※「スタイロフォーム」はザ・ダウ・ケミカル・カンパニーの登録商標。

断熱性・保温性に優れた軽くて丈夫な素材で、建築の地下材として多く使用されている

地下鉄～地下街を通して搬入

加工したパーツを地下鉄で運び、地下街を通してプラザへ搬入

市電～地下街を通して搬入

四角いパーツを市電へ詰め込んで運び、地下街を通してプラザへ搬入

〔移動・搬入ルート〕

新さっぽろ駅—〈地下鉄東西線〉—大通駅—〈さっぽろ地下街オーロラタウン〉—**札幌市民交流プラザSCARTSモールC**—すすきの駅—電車事業所前駅—〈市電〉—すすきの駅—〈さっぽろ地下街ポールタウン〉—〈地下コンコース〉—**札幌市民交流プラザSCARTSモールC**

10月4日(金)

プラザで公開設営 11:00～16:00

前日に搬入したパーツを高さ7mに積み上げ、来館者が座って憩える居場所を公開設営

完成記念セレモニー 17:30～18:00

テープカットを行い、完成を祝う

一般開放 18:00～19:00

自由に楽しむ

10月5日(土)～13日(日)

みんなで憩う 11:00～18:00(5日・6日は19:00まで)

ピースに座ったり寝転んだりして居心地を楽しむ

会場では、搬入や公開制作を行うプロセスを記録した映像を上映

10月14日(月・祝)

解体

物体を解体し、パーツをベンチとして札幌市民交流プラザ館内に点在させる

10月15日(火)～27日(日)

それぞれ憩う 9:00～22:00

自由に利用する



〈さっぽろ地下街オーロラタウン〉



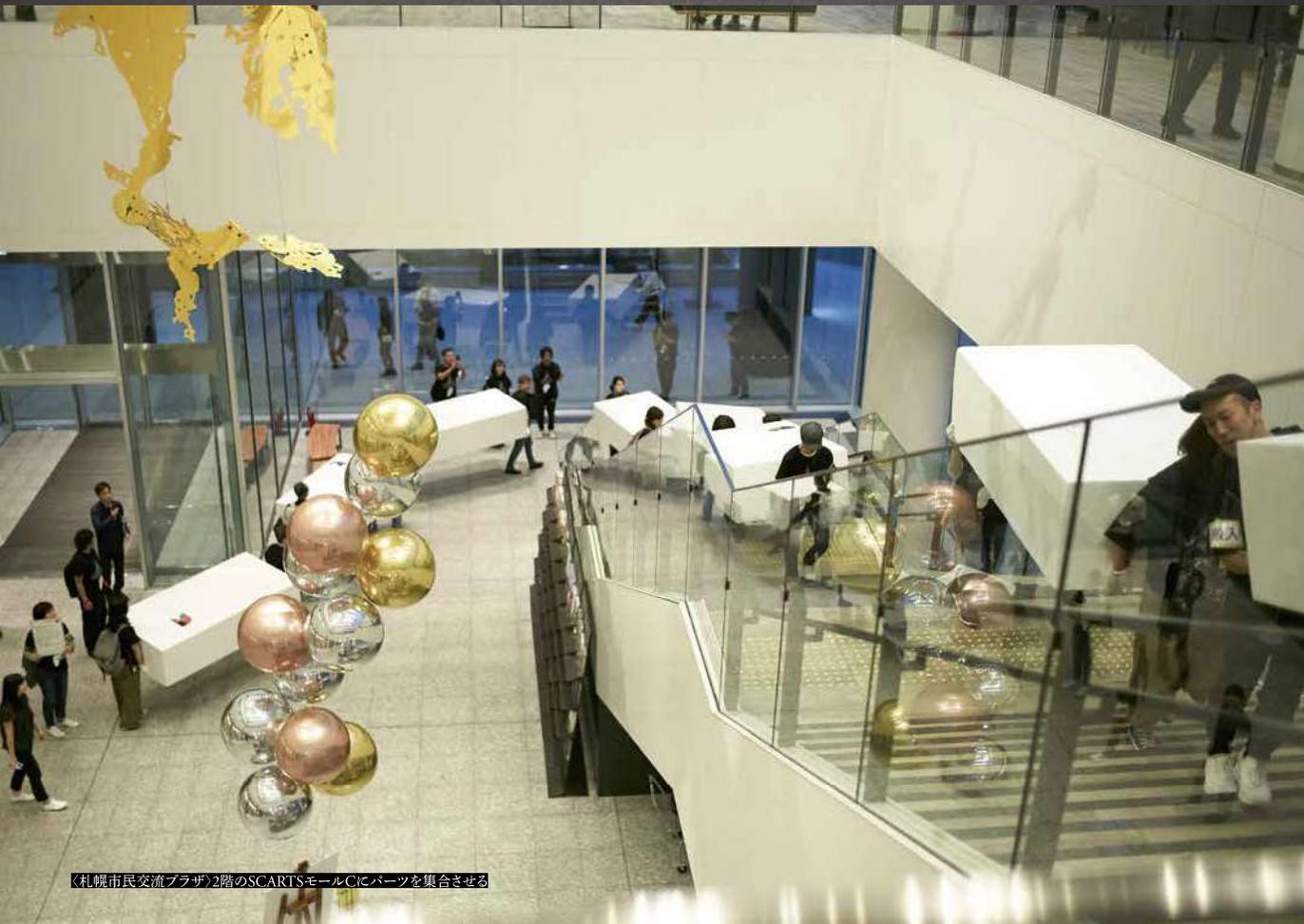
〈市電すすきの駅いっぱいになった市電。すすきの駅へ向かう〉

〈実施までの流れ〉

- 2018年
- 12月 1周年記念事業として搬入プロジェクトの開催が内部で決定、悪魔のしるしへ打診
※当初は札幌市民交流プラザ内の管理ルールや構造上の制限を生かす形で、館内を中心に実施する想定で計画されていた
- 2019年
- 1月25日 悪魔のしるしと初の遠隔会議。オープン化した作品のため、札幌での独自プロジェクトとして進めることになる
- 3月14日 プロジェクトを牽引する役割として酒井秀治氏に協力を打診
- 3月21日 酒井氏と初打合せ
- 4月26日 悪魔のしるしと遠隔会議、進捗の報告
- 5月14日 建築家の五十嵐淳氏に協力を打診
- 5月20日 五十嵐氏、酒井氏の両者と初の打合せ。「搬入後に人が使えるものにしたい」「施設内部で完結せず、街とつながる搬入にしたい」「公共交通機関を使用できないか」「素材を破棄せず生かしたい」等のアイデアが出る
- 5月26日 酒井氏より「プラザ・まち・ひとつを繋げる」というコンセプトが提示される
- 5月28日 五十嵐氏より、パーツの切り出しから搬入、巨大なオブジェの完成までを一体とするプロジェクトとして提案される
- 6月17日 地下鉄大谷地駅にて交通局の小野風太氏と打合せ
- 6月20日 悪魔のしるしと遠隔会議。札幌独自の搬入プロジェクトとして、ルール上の「ギリギリ」を、都市や施設の「規制のギリギリ」という解釈にして実施することや、プロジェクトの方向性を伝え、了承を得る
- 7月23日 五十嵐氏よりオブジェの完成模型が提示される
- 7月24日 札幌市文化局へ相談し、交通局へ市電の撮影許可などを申請
- 8月6日 地下街の使用について札幌市経済観光局に相談
- 8月7日 地下街の使用について管理者である札幌都市開発公社に連絡
- 8月9日 交通局運輸課(大通駅構内)でスタイロフォームの加工実験。焼き切る際の煙の量、車内で乗客の邪魔にならないよう運搬できるか、スタイロフォームをぶつけた際にホームに破片が落下しないか(遅延リスク)などを検証することに
- 8月13日 札幌都市開発公社で地下街の使用と撮影の説明
- 8月22日 地下鉄栄町駅から回送列車を使って、車両への搬入実験を行う
- 8月28日 市電の電車事業所で打合せ、市電車両のサイズを計測、導線を確認。参加者募集開始
- 9月3日 地下鉄新さっぽろ駅構内でスタイロフォームの加工実験を行う
- 9月5日 北海道警察交通課の窓口へ相談。通常、地下道や歩道での物資の運搬は許可していないため、安全性の確認と人員体制の明確化をし、各部署の了承が必要になるとのこと。資料を作成し、札幌市市民文化局→交通局→建設局→北海道警察というルートで説明と申請を行う
- 9月18日 交通局運輸課にて打合せ。運搬するスタイロフォームのサイズや数を確認
- 9月27日 札幌市民交流プラザ全体共用部に煙感知器の一時停止を依頼(加工作業中に煙が発生するため)
- 9月30日 スタイロフォームをSCARTSモールCに事前搬入
- 10月1日 酒井氏による参加者向け事前レクチャー①。SCARTS職員に役割分担を説明
- 10月2日 酒井氏による参加者向け事前レクチャー②。札幌市民交流プラザ内の職員に役割分担を説明
- 10月3日 「Collective Pーまちとプラザをつなぐ搬入プロジェクトー」実施



〈すすきの〉安全に気をつけながら横断歩道を渡る



〈札幌市民交流プラザ2階のSCARTSモールC〉にパーツを集めさせる

〔関連イベント〕

Collective P —まちとプラザをつなぐ搬入プロジェクト—
ふりかえりトーク

日時 2019年10月5日(土) 16:00～17:30

会場 SCARTSモールC

参加費 無料

出演 五十嵐淳(建築家)、酒井秀治(まちづくりプランナー)、
小野風太(札幌市交通局)、岩田拓朗(札幌文化芸術交流センター SCARTSテクニカルディレクター)

公開制作～搬入～完成までを、当日の記録映像を上映しながら振り返るトークを開催しました。準備の裏側や、当日気づいたこと、参加者の感想も伺いながら、このプロジェクトを経て考えたこと、見えたことなどを共有しました。

悪魔のしるし「搬入プロジェクト」

演出家の危口統之(1975～2017)が、2008年に結成したパフォーマンス集団「悪魔のしるし」によるプロジェクト。ある空間に「入らなそうでギリギリ入る物体」を設計・製作し、それを実際に入れてみる(搬入してみる)というもので、その際に参加者や観客の間で偶発的・即興的に生まれる協働やアイデアの交換、祝祭性が特徴。危口統之没後の現在は、その意志を継ぐ形で2018年に著作権放棄され、オープン化が宣言された。



左から、岩田拓朗、五十嵐淳、酒井秀治、小野風太

Collective P

—まちとプラザをつなぐ搬入プロジェクト—

ふりかえりトーク

Talk

日時 2019年10月5日(土) 16:00~17:30

会場 SCARTSモールC

出演 五十嵐淳(建築家)

酒井秀治(まちづくりプランナー)

小野風太(札幌市交通局)

岩田拓朗(札幌文化芸術交流センター SCARTS テクニカルディレクター)

建築家、まちづくりプランナー、交通局長 それぞれの関わり

岩田 札幌文化芸術交流センター SCARTSの岩田と申します。よろしくお願ひします。まず、そもそもなぜこんなことをやろうと思ったのかを説明させていただきます。このプロジェクトは、札幌市民交流プラザの1周年記念事業として計画されました。はじめは、1周年を機に札幌市民交流プラザの複合施設としての構造や、市民の皆さんが展覧会や催し物をされる時にも使用される搬入用の裏導線などの経路の複雑さを、どうかポジティブに捉えながら開いていけないか、バックヤードも含めて見てもらうことができないかということを考えたときに、悪魔のしるしというパフォーマンス集団が行っている「搬入プロジェクト」のメソッドを使って、ここで再現してみようという話から始まりました。オリジナルの搬入プロジェクトは、簡単に説明すると、「ある空間に入らなさそうでギリギリ入る巨大な物体を設計・製作し、それを搬入するパフォーマンス」で、割と厳密にルールが決まっています。しかし、ご覧の通り、交流プラザ自体がものすごく広大な空間を持つ建物なので、搬入プロジェクトのルールをそのまま踏襲しても、あまり面白いことにはならないんじゃないかという思いがありました。そこで、札幌でのオリジナルチームで、搬入プロジェクトのルールを読み替えながら実施の方がよいのではないかと、悪魔のしるしの方々にもいろいろ相談させ

ていただいて、組み立てていきました。この建物は札幌市民交流プラザという名前もついているので、やはり市民を巻き込んで、まちを巻き込んで、搬入をできないか考えたんです。

その読み替えの中で、札幌に縦横に走っている公共交通機関を使って、まちの各所からパーツを運んでくる、そしてその制約の「ギリギリ」を攻めることで、まち全体をパフォーマンスの場所にするという案が出てきました。はじめは創成川を使って船で運ぶ、というようなアイデアもあったのですが、それだとプレイヤーと、それを外から見ている観客とに役割が分断されてしまう。そうではなく、普段の日常の風景が、その瞬間だけ別のものに見えてくるような感覚を誘発できると面白いのではないかと考えていたので、まちに異質なもののパフォーマンスを持ち込むというイメージをもって組み替えていきました。例えば、電車で大きなパーツを持って乗っている人々がいるだとか、白くて大きな何かを運んでいる人がまちにいるという状態がそうです。今回やってみて、最初の構想の大事なところは現実になったなと思いました。

おそらく多くの人にとって、今回の搬入プロジェクトはまちのハックというか、ゲリラ的なものに見えると思うのですが、実際には、各所での交渉やチェックをきちんと経たうえて、何とか搬入を実現できることになりました。終わってみて、皆さんの感想はいかがですか？

五十嵐 こんにちは、五十嵐です。僕はアーティストではなく建築家なので、今回誘っていただいたときも、



Collective P—まちとプラザをつなぐ搬入プロジェクト—「ふりかえりトークの様子」撮影：株式会社マークスタジオ

建築家として携わることができないかと考えていました。アートという、どうしても鑑賞物になりがちなものが多いですよね。作家がつくったものを眺めて、何かを感じる。特に現代アートは概念的にややこしかったり、読み解かないと理解できないような作品も多いと思うのですが、それによってアートに興味のない人は素通りしてしまったりもします。だから、鑑賞物のようにするのは避けたいと思っていました。それに、人間が能動的に関わってくれるようなきっかけをつくれると良いなと思っていました。今日来てくれた方はわかると思うんですけど、子どもってそういうのに本能的に反応してくれるので、これを見た途端に、登り始めるんですよね。登っていかどうかもわからないはずなのに。これは本当に面白い現象で、こういうことですごく大事だと思っています。建築物だとかなかなか、こういう形にはできません。机でもないし椅子でもないものを、ここまで巨大に、自由につくるといことは不可能なんですけど、やはりこういったものがつくれたのは、アートプロジェクトならではの自由さがあるのではないかと思います(写真1)。

素材として使っているスタイロフォームは、基本的に建築の表舞台には出てこない素材でした。断熱材とか、下地に使われることが多いので、こういう形でダイレクトに肌に触れることは珍しいんですね。皆さん、今お尻のあたりがポカポカしてるんじゃないかと思うんですけど、この素材の特性は保温性です。以前、ほかのプロジェクトでギャラリーにスタイロフォームを積み上げて丘のようにしたことがありました。初夏だったのですが寒い日もあるし、屋外だったので少し心配したのですが、この素材が温かいお陰で、観客の滞在時間が長くなったり、毎日その上でお弁当を食べる人が現れたりとか、想定外のことがあって面白



写真1 運び込まれたパーツにより巨大な作品に仕上がった
撮影:株式会社マークスタジオ

かったんです。それをこの空間でも応用できないかなと思いました。あと、登山される方はいらっしゃいますか? チベットなどには山の頂上に石を積んでいく習慣があるんですが、それもイメージの中にありました。札幌市民交流プラザは、札幌にとって文化の重要な拠点になるので、みんなで集めて持ち寄った石を積んで、シンボルのようなものをつくれなかなという気持ちがありました。

酒井 酒井です。どうぞよろしく申し上げます。私は建築の仕事もするんですが、どちらかというまぢづくりの仕事をしています。まぢづくりは行政だけではできないので、地域の皆さんと一緒に参加して対話をしていくような方法を考えたり、市民が主体的に動くにはどうしていくかというのをデザインしていくことが多いです。

そもそも搬入プロジェクトというのは、その場に偶然立ち会ってしまった人までもが参加することを受け入れるからこそ、ある種の演劇性を持つというパフォーマンスで、参加可能性の非常に高いものだと思います。ですので、市民の皆さんがこのプロジェクトに出会ったときに、どのようにしたらこの体験を受け入れ、なおかつ楽しんでやってくれるのか、そして、コンセプトである「ギリギリ」をどうデザインするかということを考えていました。このあと小野さんがいろいろ話してくれると思うんですけど、地下鉄は本当にルールが厳しいんですね。それは当然です。市民の皆さんを安全に移動させることが、地下鉄の一番のミッションですから。そこに、このわけのわからない物体を乗けて運ぶということで、開催までかなりやりとりしてきました。運べるサイズについても揉めに揉めて、なんとか実現したという感じです。

もうひとつ言うと、こういうイベントというのは、参加している人はお祭りっぽく盛り上がりって一体感が出るんですが、周りから見るとちょっと気持ち悪い、みたいなことよくありますよね。「内輪は盛り上がり……」って。そうならないギリギリを突くのが結構重要なことだと思っていて、見ている人も思わずワクワクして参加できる雰囲気になるような行進をしたつもりです(写真2)。

小野 交通局の小野と申します。僕は普段、交通局では総務課という堅めのところで働いてまして、こ



写真2 旗を持って先導する酒井

ういうTシャツを着て働くような人間ではないんですけど(笑)。岩田さんから相談があったときに、地下鉄や市電を使って搬入をしたいと言われて、「この人、何を言ってるんだろう……」と思いました(笑)。ただ、最初は大したことないだろう、まったく問題なく進められるだろうと僕も思っていたんですね。「荷物を運ぶだけでしょ」ってくらいで考えていたんですけど、駅を管理している部署に持って行ってみると、ものすごく怒られて(笑)。「何言ってんの!」って。でも試しにやってみましょうよと話をし、まずは駅に行ってパーツをカットしてみたんです。カットするのも大したことはないと思っていたのですが、煙が出て、匂いが発生して(笑)。大変でしたよね。そのような感じで、調整に手間取りつつも、諸々が終わってようやく実現できるなと思っていた開催1週間前くらいにですね……大変なことがありました。地下鉄って実はいろんな部署があって、駅員さんと、駅の施設を管理する人、運転手さんを管理する人、運転などの指令を出しているところ、の4つの部署に確認をしなきゃいけなかったんですけど、運転手さんの部署に確認するのを忘れてまして。電話がかかってきて無茶苦茶怒られましたね(笑)。大人が大人に本気で怒られるという、なかなかできない良い経験をさせていただきました(笑)。私自身これをやってどうなるのか、本当に面白いのか、最後までよくわからないまま参加してはいたんですけど、地下鉄にものに乗っかっている様子とか、市電に人ともものがバンバンに乗っている様子とかを見ると、面白い画だなんて思って、やってよかったなと思いました。

地下鉄駅構内での 公開作業

岩田 ありがとうございます。ではここからは、当日の映像を振り返りながら、話していきたいと思います。「ここどうなってるの?」とか、わからないところがあったら聞いてくれると嬉しいです。最初から振り返っていきましょう。一番はじめの駅は新さっぽろ駅です。なぜ新さっぽろ駅かという、いろいろあるんですね。

小野 はい。もともと、長い距離を運びたいというオーダーだったので、いくつか駅の候補を挙げたんですが、加工するための広い場所が必要だということで、最終的に新さっぽろ駅と栄町駅が候補になりました。でも栄町駅は風の流れて匂いが滞留してしまうからと、新さっぽろ駅になったんですね。ほかの駅に関しては、そんなに広い場所がなくて。

岩田 これが搬入当日の朝ですね。新さっぽろ駅で、スタイロフォームをカットする段取りをしているところです(写真3)。パーツの設計にあたって、カットする形というのはどのように検討したんですか?

五十嵐 組み上げた完成形をベースにパーツの形は考えるのですが、そのときにも、人間の能動的な行動をどう誘発できるのかを考えていましたね。カットする線の引き方というのは無限にスタディできるので、普段は合理性とか、性能とかを考えて決めています。しかも普段はプロの職人などがつくることを前提に建築を考えるんですけど、今回は市民参加型で、どんな人がカットするのかわからない状況なので、難しそうだけど簡単に切れる方法などを含めて考えてつくりました(写真4)。

岩田 これは、新さっぽろ駅でカットして搬入するスタイロフォームの真物(加工しないままの素材)を運んで



写真3 新さっぽろ駅にて作業場所を準備

あたらしい表現の可能性をひらく



写真4 パーツのサイズや形はさまざま

いるところ。4つですね。4つを20数個のパーツに細かく刻んで、それをひとりかふたりで運びました。

酒井 このとき、掃除のおばさんにめちゃめちゃ睨まれました。

小野 駅員さんに「こんなことやるなんてひとつも聞いてないんですけど」と言われて、情報伝達の難しさを感じたのと、改めて現場って怖いなって思いましたね(笑)。

岩田 そうなんです。僕は、片付けのために最後まで駅にいたんですが、駅員さんに挨拶に行ったら、すごいニコニコして、「なんか面白いことしてるね」って感じでしたけど。

11時30分に参加者に集合してもらって酒井さんに段取りの説明してもらいました。カットする時間がかなりタイトで、実質50分くらいで20パーツ強を切らなきゃいけないスケジュールでした。平日の昼間の開催だったので、やっぱり学生さんはなかなか参加が難しく、高齢の方や、主婦層の方が多かったです。

酒井 一番上のパーツを持っていたのは80代の方でしたね。

岩田 これが実際にカットしたところです(写真5)。熱を与えるときクロム線が熱くなって、スタイロフォームを溶かしながらカットするというもので、触ると火傷するような、けっこう危険なものなんです。皆さんに革手袋をしていただいて、安全に留意しながらカットしていただいています。ひとり1カットはしていただきますという目標設定でした。参加者の方は、これは難しいから私はこれをやる、みたいに関割分担任していましたよ。

酒井 そうですね。僕らもそんなにうまくないですから、みんな同じくらいのレベルで、混じってやりました。



写真5 電熱線でパーツにカットする



写真6 パーツを持ちながら改札を通る

岩田 ここでつくったパーツは、すごく大きなものではないんですが、駅を通行する一般の方は「何やってるの?」って感じで見ていましたね。それは怒っているとかではなくて、やっぱり異質なものだから、何をやっているのか気になってスタッフに話しかけてくれる人もいました。

来場者 さきほど「匂いの問題」と言われましたが、外で切るプランはなかったのですか?

岩田 もちろん外で切ることも可能だったし、そちらのほうが楽だったと思います。地下鉄駅の会議室でカットするという話も一度出たのですが、でもやっぱり人目に触れさせたいと思っていました。それで駅の方をお願いをして、駅の構内で場所を選定していただきました。匂いといっても有害なガスを出すわけじゃないのですが、焼き切ることで煤のような匂いがどうしても出てしまう。人によっては気にされる方もいると思いますので、いかに匂いを出さないようにするかを考え、ファンを回しながら空気清浄機も稼働させたりしました。

切り出したパーツと共に 地下鉄車両内へ

岩田 そのあと、切り出したパーツにステッカーを貼って、運搬に備えましたね。このステッカーが結構大きくて、これがあることによって何かをやっている感じを演出できていたと思います。Tシャツもそのための工夫ですね。いよいよ改札なのですが、皆さんにも切符を1枚ずつ渡して、通ってもらいました。

小野 最初、全然上手くいかなかったですね(写真6)。ポーって警報が鳴って。

岩田 そうですね。駅の方には、切符を買ってもらったら改札脇の柵を開けるから、そこから改札内に入ると助言をいただいていたんですよ。でも、「いやいや、改札を通らないと意味がないです」っていう話をして、ちょっとだけ強引にやらせてもらいました。結構人が詰まっていた。

小野 結構詰まってきましたね。時間もかかるから自動改札の警報が鳴っちゃうんですね。

酒井 このあと大通駅では全部横から通りました。

来場者 地下鉄で大きなパーツを運ぶのが禁止されたのは、危ないからでしょうか?



写真7 地下鉄に乗っている様子



写真8 地下鉄に乗っている様子

小野 スタイロフォームは発泡スチロールみたいなもので、危ないものではないというのはわかっていたのですが、一般のお客様も乗っている電車で運ぶので、お客様が座れなくなったりすることを心配していました。それと、座っている人の目の前に大きなものがあると不快感につながるかもしれないという話をしていました。でも、その不快感につながるかもというのは、明文化されていることではなく感覚的な問題なので調整が難しかったですね。ですので、加工しない真物サイズは最初から却下という感じでした(写真7)。

岩田 パーツの大きさを検討しているときに、真物のままの大きさを電車に乗せられるかどうかをチェックするために、栄町駅に真物を車に乗せて持って行って、特別な列車に乗ってもらいましたよ。

小野 回送車ですね。栄町駅の奥に地下鉄を停めておいて、試しに乗せてみたんですが……。

岩田 まあ、渋かったですよ、反応が。

小野 あのときは岩田さんは遠くを見てましたよ(笑)。

酒井 ヤバいと思いました。でも何とかこのままのサイズで乗せられないですかってお話したんですけど、やっぱりダメでしたね。

小野 ダメでしたね。

岩田 この真物サイズは、SCARTSモールのこのスケール感(天井10m)で見ると、そんなに大きくは見えないんですけど、地下鉄車両ってやっぱりそこまで幅がないので、車両に乗せて、斜めにして扉を通したり、座ってみたり立ててみたりしようとしたときに、やっぱり大きいんですね。2m×1mなので。なので、仕方ないことだとは思ってます。でも真物の運搬、実現したかったですね。さて、これはもう大通駅です。列になってプラザ方向へ向かいます。小さいパーツのときは、通行者の方からの反応はそんなにないですね(写真8)。

五十嵐 でも、結構な長さの行列だったので、一番緊張感がありましたよ。

岩田 記録映像を見返していると、やっぱり大きいものを持っているときの方が、参加者の顔が堂々としてるといってか、やっぱり少し顔つきが違います。プロセスを経ているので、自分の所有物なんだという感じが出ている気がして、すごく面白いなと思いましたね。参加者の方がいらっしゃるので聞いてみましょう。2回



写真8 大通駅から札幌市民プラザ方向へ

ション力だなどと思って、そういうことにただ感動していました。

岩田 ありがとうございます。そちらの方はどうでしょうか？

参加者C 最初は、このイベントにどういう狙いがあるのかも全然わからなくて、ただお付き合いで来たという感じでした。でも途中から遠足気分になったり、市民の代表みたいな感覚になったりしました。イベントの少し前に友人たちに会うことがあって、こういうのに参加するんだと話したら、意外と「何それ?! 楽しそう! 頑張っ!」って言われて。みんなの思いを背負ってきたという気もします。一番楽しかったのは、混み混みの電車の中でみんなで移動したところですね。ひとつの乗り物で移動するっていう達成感がありました。

貸切った市電車両が スタイロフォームと参加者でいっぱい

岩田 続いて、午後の様子です。今度は電車事業所にみんなで市電で向かいました。まずは手ぶらです。みんなこの黒いTシャツを着ているので、こういった団体が地下道を歩いているだけで異質というか、何かをやっているんだと、目をひいたと思います。

酒井 僕もこの頃はもう照れがなくなりましたね(笑)。

岩田 これが市電のすすきの駅です(写真9)。貸切専用の停留所になっているんですね。すすきの駅から市電で電車事業所に移動して、貸し切った1両の車両の中に、真物サイズのスタイロフォームを強引に入れていきました。みんなで列をなして一つひとつ入れていって、ステッカーも貼りましたね。それから、皆さんに



写真9 すすきの駅の貸切専用停留所

運ばれたと思うんですけど、1回目に運んでみた印象と、2回目に運んでみた印象で、何か自分の中での違いはありましたか？

参加者A 単純に、1回目に運んだ時より2回目の方が重かった印象がありました。1回目はひとりでも持てるような軽さだったんですけど、2回目はふたりで持っても重量感があって、結構きつかったなって。

酒井 2回目はもう照れがなくなりましたよね。周りから見られている快感が出てきて。

小野 疲れているようにも見ましたがね(笑)。

岩田 この日は少し風があったのですが、ギリギリ雨は降っていませんでした。風は天敵で、やっぱり面が大きいものだとして風を受けてしまって、大変でしたね。信号待ちをして、酒井さんが先導しながら、プラザに入りました。階段をあがって、モールCに運び入れて、これで前半部分の、地下鉄を利用して搬入するところは終わりです。このタイミングで、まだ一往復あるぞという感じだったんですけど、どうもお気持ちでした？

参加者B この時点ではまだ序の口っていう感じでしたね。地下鉄の中で、ほかのお客さんに丁寧に説明をされていた方がいたんですけど、すごいコミュニケー



写真10 市電の車両にパーツを運び入れる

もそのまま乗ってもらって、人とスタイロフォームが車両の中でゴチャっとなっている状態。そこに、「次はこれこっだ!」みたいなやりとりをしながら入れていきました。入れ終わったあとに、車掌さんが車両をスイッチバックさせなくてはいけないところがあるんですけど、方向転換のために、車両の真ん中を通して反対側の運転席に行く必要があったので、パツパツなのにみんなで協力して道をあけたりしましたね(写真10)。

小野 今回、前日にトラブルがあって、貸切専用じゃない車両を急遽使うことになったんです。貸切専用車両は一度前から出て、外から後ろの運転席に入れるのですが、この車両は中を通らないといけないんですよ。でも通路もパンパンだったから「痩せてるやつに変えた方がいいか?」と運転手さんに言われましたね(笑)(写真11)。

酒井 このときの岩田さん、一番楽しそうでしたよね

岩田 いやー、楽しかったですね。地下鉄のときは、準備して、撤去までしなきゃいけなかったんで、みんなと一緒に地下鉄に乗れなかったんです。だから、ようやく一丸となって動けるポイントだったので、はしゃいでいました。電車の乗り心地はどうでしたか？

参加者C 通勤に比べると普通でしたね。車内がパンパンで、顎のあたりまでスタイロフォームがあったので、少し背伸びをして乗っていました。私は外があまり見えなかったんですけど、外から見た人みんなにギョッと驚いて欲しかったですよね。

参加者D 私はスタイロフォームとドアの間に挟まるようにして乗っていたので結構外が見えていたんですけど、道行く人の反応が本当に面白くて。人によっては3度見くらいして、自転車のおじさんがちょっとコケそうになっていたり。ぎゅうぎゅうなので乗り心地としては良くはなかったんですけど(笑)、とても面白い体験をさせていただきました。

岩田 この日の記録映像を見ていたら、外から手を振られたり、中の人振り返したりして面白いですね。停留所に停まったときに、乗れるのかと思って乗ってこようとした人がいたりして、それを参加者の方が説明していたり。いろんなやりとりが発生していました。さて、すすきの駅に着いて、地下街を進行していきました。急な階段があったり、距離も長いですし、できるだけフォローしながら思っていました。でも参加者の人に「代わりましょうか?」ときいても、なかなかみんな代わってくれないんですね。「いや、大丈夫」って言って最後まで頑張ってくれました。けっこう辛かったんじゃないでしょうか？

参加者E はい、思ったよりも長い道のりでしたね。でも周りの人たちに、「何してるんだろう?」って興味を持ってもらっている様子を見ると、「やり遂げなきゃ!」という気持ちになりました。

岩田 地下街ポールタウンを通過しています(写真12)。僕たちのシュミレーションだと、スタイロフォームを立てて持ったほうが支えやすいし運びやすいのではと



写真11 パーツと人で車内がいっぱい



写真12 さっぽろ地下街ボールタウンを選び歩く

思っていたのですが、そうすると後ろの人が前を見られないから、参加者同士で工夫して、横倒しで持つことになってましたね。それをまた後ろの人が同じようにして……と。

小野「棺桶みたい」と言っている人もいましたね。

岩田 儀式的な感じはありましたよね。真つすぐ並んでたし。でもそれにはみんな笑顔で(笑)。

参加者B 私、このあたりで疑問がわいてきてたんです。1日目の電車事業所に行くあたりから疑問がわいてきていて、2日目の組み上げのときは残りの部材をカットするのを手伝っていたんですけど、夜もずっと考えていて。今日は結論を出したいと思って来ました。

岩田 それはとても気になりますね。

参加者B この中には映ってないんですけど、実は要所要所でスタッフの方が掃除機を持ってきてきれいに掃除してくれていたり、地下鉄の中も見守ってくれていたりとか、スタッフの方も見てる人に説明したりだとか、身を挺してサポートしてくれていましたよね。参加しているほうは、実は至れり尽せりなんです。今日お話に出てきたシミュレーションもだし、事前の準備がいっぱいあったんだと思います。でも、これだけスタッフの方が手回しして、行進でも先に立ってくれているのに、今組み上がっているものは、そのうち壊してしまふ。だったらこのプロジェクトの遺産としては、何が残るんだろうかと思っていました。私ははじめ、地下鉄構内で作業していたときや電車に乗るときに、市民がもっとびっくりしたり、「何やってるの?」ってもっと聞いてくれると思ってたんですけど、みんなすごく無反応だなと思ったんです。私は札幌で生まれ育ったんですけど、少しの期間東京や大阪にいたと

きに、札幌の魅力って何だろうって考えるときがありました。それもあって、そこまで準備して実施したこのプロジェクトの、レガシーとして一体何が残るんだろうと、参加しながらいろいろな疑問がわいてきて、悩んでいました。

岩田 なるほど。そうですね、正直なところ、その疑問には答えられないなって、個人的には思います。だからこそ、こういったプロジェクトを実施している意味があるんだと思います。「これは実はすごく意義深いもので……」というお話をつくることもできるかもしれませんが、でもそんな風にオチをつけるのはつまらないし、今おっしゃられたような疑問が生まれえないものというのは、面白くないと思うですよ。ずるい言い方ですけど、そんな風に、疑問がどんどんどんどんわいてきて、「何でだろう」って考えていること自体が重要な気がしています。

五十嵐 確かに疑問を抱くって、大事ですね。僕もスタッフに、すべての事柄において常に疑問を持って取り組みなさいと言っています。考えるきっかけが疑問を持つということなので、とても重要なことなんじゃないかなって思います。

イベント、札幌のまちの人々に対して感じた参加者の声

岩田 もうけっこう終盤です。地下コンコースにさしかかっているかな(写真13)。黙々と運んでいますね。そして最後にこのモールCにすべて到着しました。一昨日の搬入としてはここまでで、昨日その素材を組み上げて、塔が完成しています。さて、そろそろ時間も迫ってきましたので、まとめに入りたいのですが、参加してくださった方、何かコメントをもらえるかと嬉し



写真13 地下コンコースへ

いです。

参加者F 今回はじめてこういったイベントに参加したのですが、私はまちの人にとっても参加のハードルが低かったと思っています。実は運んでいる途中で、2、3人の方には声をかけられたんですよ。そのときに、交流プラザの1周年なんですよって言ったらある部分は納得してくれて。人によっては「おつかれさまです!」って楽しそうに言ってくれました。何となくだけど、札幌市の施設がまちに向けた取り組みをやっているということが、伝わった気がしました。そこに参加していた自分としても、ちょっとワクワクしました。

参加者G 今回イベントに参加して、いろんな方々の協力があったってできたというのは、一般市民としてすごくよかったです。私もこの施設ができてから何度か訪れてはいるんですが、さっきから子どもたちが楽しそうに遊んでるのを見ていて、これまで子どもの姿を見ることって、あまりなかったなと気づきました。これを機にこういう場所があるって覚えていただきたいなと思いました(写真14)。

参加者H 僕も今回はじめて参加したんですが、まちの中で公共交通機関を使って遊んでいるという感覚があったり、普段はこんなことできないんじゃないかなって思っていることが意外とできたりして、今回だけではなく今後もこういった実験的なことができればもっとまち全体が面白くなるんじゃないかなって思いました。

参加者I 今回参加したきっかけが、酒井さんからの声かけでした。でも、こういう美術とか文化的なことって、生活している中では優先順位が低いものになってしまっている。どうしても日々の楽しみとかバーゲンの



写真14 出来上がった憩いの場は、子どもたちにとっての遊び場
撮影:株式会社マークスタジオ

買い物とかのほうの方が優先しがちになってしまうんだけど、やっぱり実際に参加してみることで、バーゲンで買い物するよりも、もっとすごい体験とか、面白いなって思うことに出会えるなって今回思いました。

参加者B 私はもしかしたら、皆さんと意見が違ふかもしれないんですけど、もっと飛び入り参加の方がいるんじゃないかって思っていました。でも結局全然いなかったなど。地下鉄に乗ってるときに、隣に誰かが来たら「どうぞかけてください」って言おうとワクワクしていたんですけど、圧倒的に断られるほうが多くて。大阪とかだと周りでおばちゃんたちが、きゃあきゃあ言って楽しんだりしてくれるんですけどね。札幌ってなんだか、東京以上に閉鎖的な都市だという感じが私はしていたので、もっとオープンな都市にするにはどうしたらいいのかなってずっと考えていました。だから、例えば今回の搬入を見た人や参加した人が、一人ひとり思うことがあったらいいなと思います。

参加者J すごい久しぶりの学校祭みたいな感じで楽しかったです。札幌にいて、美術館も少ないし美術学校も少ないし、アートに触れる機会も少ないなと思うんですけど、まちなかでこういうことをやっているとすごく楽しいし、これからもこういった変なことを発信していってもらえると嬉しいなと期待しています。

岩田 ありがとうございます。ではそろそろ時間もなくなりましたのでこれで終わりにしたいと思います。いろいろなど意見をいただけたし、今、単純にこのプロジェクトをできて良かったなと思っています。SCARTSがオープンして1年が経ちました。僕たちもさまざまな事業をやっていく中で、このできたばかりのアートセンターをどう展開していこうかと日々考えているのですが、ここが美術館ではなくアートセンターである意義というのは、やっぱりプロジェクト型の、動き続けていくような活動ができることだと思っています。今回、SCARTSの中だけにとどまらず、外に出て、市民の皆さんとまちを舞台に動くことができた。道ゆく人たちにも、少しだけでも違和感というか、日常の中にささやかな異質さを投げ込むことができたかなと思っています。それに、今回は酒井さん、五十嵐さん、小野さんをはじめたくさんの方に関わっていただいて、それも大きな財産だなと感じています。ここに閉じてもっているだけだと見えてこない風景がくれた

し、動くことで新しいつながりができて広がっていく、その実感を持つことができました。こういった動きの中で生まれた関係性や出来事、疑問でもいいんですが、また次の動きにつなげて行ってもらえたらと思いますし、SCARTSとしても動いていきたいと思っています。今日は長い時間、ありがとうございました。

岩田拓朗

プロフィールはp.89参照。

五十嵐淳

1970年北海道生まれ。建築家。常に「人間の原初的な居場所」という「状態」を模索し、北海道の風土や気候条件、風景との共生を前提とした豊かで独自の空間を生み出している。著書に『五十嵐淳／状態の構築』(TOTO出版、2011年)、『五十嵐淳／状態の表示』(彰国社、2011年)。主な展覧会に「状態の構築」(TOTOギャラリー・間、東京、2011年)。第19回吉岡賞、第21回JIA新人賞、日本建築学会賞教育賞など受賞多数。オスロ建築大学客員教授を務め、海外での講演会等も多数行っている。

酒井秀治

1975年札幌市生まれ。まちづくりプランナー。北海道大学工学研究科を修了後、東京のまちづくりコンサルタントにて密集住宅地の再生に従事。2007年より札幌に戻り、都心部の再開発や広場づくり、リノベーションによるサロンやカフェの企画・デザインコーディネートを通じて、まちなかの再生・賑わいづくりに取り組む。2010年、ミツバチの目線で都市部の自然環境を見つめ直す「サッポロ・ミツバチ・プロジェクト」を設立、理事長を務める。2017年6月独立、2019年、株式会社SS計画を設立。一級建築士。

小野風太

札幌市交通局職員。「Collective P ーまちとプラザをつなぐ搬入プロジェクトー」では、札幌市営地下鉄と札幌市電を使って搬入を行うにあたり、交通局内での確認や調整、交渉やケアなど、実現までのコーディネートを手掛けた。

「Collective P」寄稿文について

悪魔のしるしによる「搬入プロジェクト」は、考案者である危口統之の「他の誰がやってもいいし、やってほしい」という意志を継ぐ形で、2018年にCC0として著作権放棄され、オープン化しました。その後、豊田市美術館で開催された展覧会「ビルディング・ロマンスー現代譚を紡ぐー」(豊田市美術館、愛知県、2018年)の参加作品として行われた搬入プロジェクトは、「悪魔のしるし」と、第三者である「山城大督と搬入プロジェクトあいち組」との共同で制作・実施され、オープン化の第一歩として、「これまでのルールに沿った搬入プロジェクト」と、「オープン化を受けて検討された搬入プロジェクト」の両者を組み合わせた形の作品となりました。

オープン化された作品は、それぞれの場所性や関わる者によって、オリジナルの文脈から離れた展開をみせていきます。一方で、プロジェクトにおける表現や著作権とは何なのか、それをあえて放棄し、「誰がやってもいい」という態度を示すことで、どのような広がりや解釈の飛躍が生まれるのかといった問いは、今後もこのプロジェクトが続く限り再考され、拡張されつづけるものなのかもしれません。

豊田市美術館に次いででの開催となった「Collective P」は、オープン化されたことを重視しつつ、悪魔のしるしとも対話を重ねた上で、まったくの第三者によるはじめての「搬入プロジェクト」となりました。そのため、プロジェクト閉幕後には、これまでの搬入プロジェクトに関わった方や、観客として見続けて来た方、主体となってきた悪魔のしるしメンバーや、今回の札幌版を動かした立場等、さまざまな視点からの意見が交換されることとなりました。オープン化による今後のプロジェクトの深化と、さらなる発展を願い、搬入プロジェクトをよく知る第三者として当日の様子を見ていただいたライターの島貫泰介氏、「悪魔のしるし」メンバーの石川卓磨氏、金森香氏、そして「Collective P」の制作を務めた五十嵐淳氏の4者より、それぞれの立場からテキストが寄せられました。

島貫泰介　札幌を訪ねて

石川卓磨　搬入プロジェクトの行く末

金森香　「搬入プロジェクト」オープン化の経過とわたしたちが死んでないという問題

五十嵐淳　「Collective Pについて。」

※島貫氏のテキストは、2019年11月に作成され、2020年10月に一部を改稿。石川氏のテキストは、2019年10月に悪魔のしるしのFacebookに掲載されたものを、2020年8月に一部を改稿。金森氏、五十嵐氏のテキストは、2020年8月に寄稿された

〈Collective P〉

2019年の10月3日から5日にかけて、数年ぶりに札幌を訪ねた。目的は「Collective P ーまちとプラザをつなぐ搬入プロジェクトー」に立会い、このレポート記事を書くため。2018年にオープンした札幌市民交流プラザの開館1周年事業の一環として行われた同企画は、発泡スチロール(スタイロフォーム)製の複数のピースを札幌市内の数カ所から同プラザ2階の公共空間に「搬入」し、巨大なひとつのモニュメントに合体、その後ふたたびパーツを分割し、プラザ内で使われる簡易なベンチやオブジェとしてリユースするという、市民参加型のアートプロジェクトである。

モニュメントを築くまでの前半部は2日間にわたって行われ、初日には新さっぽろ駅から大通り駅までの地下鉄による搬入と、電車事業所前駅からすすきの駅までの市電による搬入(市電降車後は札幌地下街を徒歩で移動し、搬入)を。2日目はそれらのパーツを使って白いタワー型のモニュメントを制作、お披露目するまでが行われた。およそ30名の市民ボランティアが制作に加わり、パーツの加工・搬入・組み立てを和気あいあいと行い、各プロセスの達成を喜びあっていた。

〈「搬入プロジェクト」とは何か Part I〉

ところで、タイトルにある「搬入プロジェクト」には元ネタが存在する。演出家の危口統之(「悪魔のしるし」主宰)が、2008年に創始した「搬入プロジェクト」(以下、「搬入」)である。シンプルな概要は以下。

ある空間に入らなそうでギリギリ入る巨大な物体を設計・製作し、それを文字通り“搬入”するパフォーマンス作品。

横浜国立大学工学部建設学科を卒業後、工事現

場で揚重工(荷揚げ屋)として働いた危口の経験から生まれた同プロジェクトは、建築現場における資材搬入のための技術・知識のアート分野における誤用・援用、演劇っぽさ、建築っぽさ、設定に異様にこだわるオタクっぽさ、「ほとんどが初対面の見知らぬ者同士が、なぜか一丸となって無為なことをして歓ぶ」祝祭性など、多面的な性質を潜在しつつ産声をあげ、そして約10年のうちに韓国、スイス、マレーシアなど諸外国も含めた多くの土地で全19回にわたって行われるという、短くも濃厚な歴史を有している。2017年3月17日に創始者の危口が肺腺癌で永眠したことで、いわば直系の搬入の命脈は絶たれたが、彼と多くの現場を共にした「悪魔のしるし」の生き残りメンバーらによって同プロジェクトの著作権放棄がなされ(これは生前の危口自身の意志でもある)、思いついたら誰でもやってよし&内容の改変も自由、という放埒な継承と伝播がいまも続いている。

つまり、2017年8月に行われた高円寺キタコレビルでの搬入、そして2018年1月の豊田市美術館(「ビルディング・ロマンスー現代譚を紡ぐー」展の関連企画として開催)に次ぐ危口不在の「搬入」の亜種、n次創作的なありようが、今回の「Collective P」でもあるのだ。

この原稿は諸般の事情で改稿を重ねてきたが、「Collective P」以降にも山口情報芸術センター[YCAM]が主催する「搬入プロジェクト 山口・中園町計画ドキュメント」(2020年8月1日～9月6日。新型コロナウイルス流行によって、搬入自体の実行は、2021年7月に延期)に関連した搬入のための実験、搬入プロジェクトを題材とするアーカイブ構築にフォーカスした企画などが全国で展開中である。

〈「搬入プロジェクト」とは何か Part II〉

生前の危口やいくつかの搬入プロジェクトに立ち

会った筆者の主観から述べれば、従来の「搬入プロジェクト」と「Collective P」のあいだには相当な性質的な隔りがある。設置会場である札幌市民交流プラザ2階へと至る導線は、巨大な吹き抜けの空間と大階段を備えており、搬入における「ギリギリ入る巨大な物体」を不特定多数で運び入れるスリリングさは生じなかった。今回の制作に関わった関係者に聞くところによれば、同施設の利用規約が制約になっただけで、その不可視の「法的なるもの」との折衝から実現へと至るプロセスが、「Collective P」の持つ批評性であったようだが、ほんの数日間現場に立ち会った筆者にとってはそれを感じるのは難しかった。過去の搬入プロジェクトに関連した展示や、先述したYCAMでのドキュメント展示ではそのプロセスを可視化する実践も充実していたので、そういった外縁的な補助線によって得られる説得力や、プロジェクトの創造的で多様な広がりには欠けていたのは率直に言って残念だった。

しかし裏を返せば、衆目に対して可視化された、発泡スチロール製のピースを数十名がまちなかを運び、札幌市民交流プラザに建立する祝祭パートは非常に充実したものであった。危口を含めた「悪魔のしるし」メンバーが主導した過去の「搬入」は、混沌と秩序を同時に呼び込もうとするパフォーマンス性に主眼を置くものであったため、安全性に一抹の不安を覚える瞬間も多くあった(搬入物の設計が足りず、搬入中に切断を強行するなどのハプニングもあったが、致命的な危険や事故が起きなかったのは「悪魔のしるし」版「搬入プロジェクト」の重要なポイントだろう)。それに対して、北海道で活躍する建築家の五十嵐淳、まちづくりプランナーである酒井秀治が主導した「Collective P」における関係各位に対する真摯なホスピタリティや実現性の安定感は、今後も脱中心的に展開していくであろう「搬入」の、新しい雛形を生み出す可能性を秘めているようにも思う。

亡くなる前の危口が、

『搬入プロジェクト』はもはや自分の作品ですらない。そもそもが単純なルールだけで構成された一種のゲームのようなものである。他の誰がやってもいいし、やってほしい。

(『CARRY-IN-PROJECT 2008–2013 DOCUMENT: WORDS and IMAGES』[「悪魔のしるし、2015年」序文より])

と書き残しているように、危口や「悪魔のしるし」の手を離れた「搬入」が他律的に増殖していくプロセスを朗らかな気持ちで見たい。

搬入プロジェクトの行く末

石川卓磨(悪魔のしるし/建築家)

2019年10月3日に、搬入プロジェクトのオープン化以後、はじめての本格的に悪魔のしるしに内容に関わっていない搬入プロジェクトが行われるということで、札幌市民交流プラザにて、札幌文化芸術交流センター SCARTS企画の実際の公演の場を訪れた。札幌の搬入は、搬入から着想を得たけども、札幌のチームによる完全にオリジナルのものであった。札幌のオリジナリティは、公共の交通機関を搬入に利用する、という点だろう。それゆえ、空間にギリギリ入る物体、というルールの「空間」とは、公共の交通機関の持つ車両などに読み替えられる。

2018年の豊田市美術館での搬入の際は、一旦第三者に投げしてみたものの、途中で口を出してしまいオープン化を謳うには中途半端さを残してしまった。なので今回は口を出さずに成り行きをひたすら見届けけることにした。

札幌の搬入は、すべてが正しく機能していた。市民がくつろげる、魅力的なキャッチーな岩山のようなスペースを、材料を市民参加で(しかも駅の構内で)加工し、地下鉄を使って、地下道を通して、関係各所と協議をして運搬可能な大きさに設定された軽くて柔らかい材料を、市民が運び入れた材料で積み上げる。最小限の加工でアトラティブになるような、施工性まで考慮した効果的な設計。周りの市民への配慮、安全面での入念な準備、交通機関との交渉。圧倒的に正しい手順で構築されている。参加者も老若男女、楽しそうである。建築家、まちづくりプロデューサーが主導しているというのも頷ける。1度目の搬入は新さっぽろ駅から地下鉄東西線で大通駅へ。2度目の搬入は市電の車庫から、貸切専用ホームで荷下し、札幌市民の生活道路である地下道を通して交流プラザへ。札幌の都市部の東西から、かなりの広範囲で繰り広げられる電車での搬入の風景。「自分の

知っている搬入プロジェクトではない」ということは事前にはわかってはいたのだが、具体的にどこが違うのかをきちんと言葉で説明できずにモヤモヤしていた。今までの搬入だって、モジュールへの気遣い、施工性、周りへの配慮、安全面での検証や関係各所との交渉など、それらの手順は抜かりなく踏んでいる。違うところはおそらくただひとつ。それは、その手続き上にある最大にして決定的なエラー「施工してから搬入する」である。通常の建設現場では当然、「搬入してから施工する」であり、札幌もまたこの正しい手順を踏襲していた。ここの「正しくなさ」こそが悪魔のしるしの搬入プロジェクトの核なのだ。周りの人が「自分が何とかしなくてはいけないのでは?」と動いてくれる状況が生まれるのは、決して手を抜いていい加減に仕事を投げているからではなく、このエラーが災害のように、どうやっても準備しきれない、予測がつかない状況を生み出してしまっているだけなのだ。市民参加のイベントとしては少し危うい「できてなさ」が確かに存在する。そのため、その場を目撃した人々は思い思いのやり方で問題を解決しようとする。そこに正しい手順は用意されていない。この「正しくなさ」からの「できてなさ」が搬入の趣きだとするならば、そこに危口の手つきを感じ取らざるをえない。

搬入プロジェクトをオープン化すると、どうもオリジナルとは違う、独自の進化をしようとする「新しい搬入」ルートの存在を感じている。2018年秋に横浜国立大学の建築学/芸術学の授業に呼んでいただいたときは、課題名をまさに「新しい搬入」とし、学生たちが自らアイデアを出し、それぞれが考える新しい搬入を、最終的に4チームに分かれて4つの搬入をした。そのときも今までの搬入プロジェクトとは違うが新しい切口の搬入を見ることができた。そのことを思い出していた。搬入プロジェクトの本質を不自由さの中で

の共同作業に見出したチームは、人の機能を一部制限する搬入、具体的には目隠しをして視覚ではなく音を頼りにした搬入を試みた。祭りとの類似性に着目したチームは家具の搬入、組立をまるでそんな祭りが存在するかのように、太鼓、笛、儀式的な動き、掛け声などで見事に偽の儀式として構成した。搬入物体の物質としてのあり方に着目したチームは、一部にヘリウムガス入りの風船を連結した不定形な、空中に浮かんでいる物体をつくることで人々の新しい動きをつくり出した。搬入すべき物体を光としたチームは、遠くの広場に設置した光源から鏡を使って光を目的地まで運び入れる、という困難で壮大な実験を行った。光の扱いにくさに、現場の指示系統は破綻し、意思疎通は困難を極めた。この困難さ(できてなさ)は不思議と搬入プロジェクトを彷彿とさせた。作家が作品をつくろうとするとき「ルールの中」でなく、「ルール設定そのものや新しい解釈」に作品の切り口を見出すやり方がある。現代美術的なアプローチである。確かに、ルール設定こそが「搬入プロジェクト」を形づくっていることは間違いない。しかし、サッカーや将棋、どろけいなど、スポーツやゲーム、遊びの中に創造性がないと言えば怒られるだろう。むしろ個人的にはルール内でのクリエイティビティを期待してしまう。スーパープレイヤーが見たこともない鮮やかな動きでゴールを決めるのを待ち焦がれてしまう。

オープン化する、しないにかかわらず、そもそも「(芸術)作品」とはつくり手のものではない。その「作品」がどんなものであるかを決めるのはいつだって受け手側の人間である。そしてまた、搬入プロジェクトの魅力をどのように解釈して実行するかも実行者の判断に委ねられている。

2020年に山口市の山口情報芸術センター[YCAM]で行われた搬入プロジェクトのワーク

ショップでは、市民参加で100体を超える物体模型が提案された。空間と格闘して立体造形を制しようとする者もいれば、建物への想いを大きな文字の物体とする案、好きな動物の形をイメージしてつくる者などさまざまであった。抽象的で搬入の難易度が高い物体案が伝統的な搬入だとすれば、具象的で搬入難易度の低い物体案というのも確かに存在しうるのだ。

自分は発案者ではないものの、この作品をずっと危口とつくってきたこともあり、客観的な視点で見ることが難しいのかもしれない。中途半端に当事者的な視点から逃れられない。まあ、逃れる必要もないのだが。当事者的な視点からも作品に対して何ができるかを考え続けたい。われわれの死後、搬入プロジェクトはどうなるのかを考えつつ。一体何が残るのか、残らないのかは知る術もないが、きつと新しい搬入が過去の搬入を位置付けていこう。解釈の連鎖反応がこの作品を遠くへ運び、人々の行動を想起させる媒体となればいい。

「搬入プロジェクト」オープン化の経過とわたしたちが死んでないという問題

金森香(悪魔のしるし 企画・プロデュース)

「搬入プロジェクト」を考案した「悪魔のしるし」の演出家・危口統之氏が逝去してから3年が経った。危口本人が元気な頃から、「搬入プロジェクト」については「誰がやってもいい・願わくば知らないうちにどこかの祭にでもなってほしい」と言っていたのを真に受け、彼の没後に本作品の著作権をフリーにしてCC0にするという試みを愚直に実施したわれわれ「悪魔のしるし」であるが、果たしてそうしたところで、何が起きるのか、それが何を意味するのか、あんまりわかっていたので、実践しながら理解しているところだ。無計画かもしれないが、予測のつかない未来に作品を放っていきたくて始めたことゆえ、どうかご容赦ください。

「搬入プロジェクト」の定義は、「ある空間に『入らなそうでギリギリ入る物体』を設計・製作し、それを実際に入れてみる」というシンプルなものである。どうとでも捉えられる。「ギリギリ」がサイズを示すのか重さなのか非物質的なものなのか、などは個々の解釈に委ねられている。まだ実施例は少ないが、大学での授業など含めてこれまで生まれた第三者による「搬入プロジェクト」では、この定義に対して所謂「悪魔のしるし」がこれまでやってきたようなメソッドとは別なベクトルを持ち込んで、ルールを独自に読み込むような試みも多かった。意図的な場合もあるが、やる人が自らの興味関心に引き寄せて考えたら自然とそうになりました、というケースもあるように思う。

今回の「搬入プロジェクト」も、このように定義を拡張していく挑戦であったと捉えている。私自身は作品の現場にお伺いできてないので、作品そのものについて大層なことは言えない。このプロジェクトがどのように参加者の方々や、建物に対して機能していたかについては、今改めてそれぞれの立場からの記述からむしろ学びたい、という立場である。

私が、この札幌のプロジェクトを通して私が率直に感じた新鮮な感慨は、われわれが、まだ死んでない、ということだった。「悪魔のしるし」を葬れずにまだのろのろと現世を徘徊している、だらしない生存者だ。ゾンビ、といえればそれはそれで格好がつくが、そこまで死んでもないのだった。

長年危口と搬入プロジェクトを実行してきた石川卓磨がいま考えていることは別な文章にまとまっているのでご一読いただければと思うが、彼にはその経験の蓄積や費やした時間からくる「搬入プロジェクト」や危口に対してのある種の矜持がある。また、彼の系統的・分類学的アプローチも興味深い。

私自身はデザイナーではないので、物体のデザインに対する主体的な感情は起こらない。が、この「オープン化」というプロジェクトもひとつの作品だと考えると、これはまだ創作の途上にあるので、より良い整備をせねばならないと感じている。大袈裟だが制度をいかにデザインするかという部分には責任がある。私たちが死んでも情報が拾えるようにしておくこと、インターネット宇宙のデブリにならないようにせねばならない。そういえば「使っていいよ」というのは簡単だが「本当に使われるようにすることこそ難しい」と、CC0について法的側面からご相談したArts and Law 永井幸輔弁護士にあるとき言われてはっとしたのだった。

言うまでもないが、今や「搬入プロジェクト」は誰のものでもないのに、誰が企画しようと、いかなる取り組みも同列だ。実績などの差はあれど、本家だから偉いわけでもないし、正しいとか間違っているとかいうことがあるわけでもない。互いに違いを面白がり、エールを贈り合ったりプロレスしたりできるといい。いろんな歌い方があっていいよね、好みはいろいろあれど、それについて語って呑み明かすのが楽しみだね、と

いう風土をつくっていきたい。

突然だが、かつて、作品と作家について危口がくれたコメントの存在を思い出したので、引用する。本田祐也というすでに他界した作曲家のアーカイブに関するクラウドファンディングの応援文である。書かれたのが2016年9月なので、すでに危口自身が体調の異変を感じ始めた頃だったかと思う。

(前略)このような記憶や感情とはまったく別の次元に作品というのは存在する。というか、そうでなければ懸命に作品を作ったり、日々そのことについて狂おしく考えている芸術家たちは救われぬ。作品が生みだされるのは個々の芸術家の想いからかもしれないが、最終的には、ロケットが燃料を捨てるように、作品も作品として独立して飛び立たねばならない。想いは切り捨てられねばならない。

(READYFOR「没後12年。奇才本田祐也とは?その楽譜を未来の音楽家に伝えよう」2016年9月9日更新(演出家の危口統之からメッセージ拝受!)<https://readyfor.jp/projects/yuyahonda/announcements/43215>より)

「搬入プロジェクト」はまさに今燃料を絶賛切り離していく過程にある。一方で、少なくとも私にとって「悪魔のしるし」や「搬入プロジェクト」の活動は、危口の視線の先にあったはずのものを、作品をとおして見続ける行為であることも否定できない。そして、それはある種の吊いの感情かもしれず、誰に止められるものではない。一生不可避な可能性大であり、その気持ちたちが活動の原動力になってさえている。

私たちは、かつて作家が私たちに教えてくれたこの世界の面白さを、それを伝えてくれたときの躍動を、忘れることはできないだろう。だからこその作品のオープン化をすすめたい。それは「開きたい」という思いと「もう一度向かい合いたい」という思いの間で、振り子が行ったり来たりするような感じだ。作品を開

いていくことと、危口さんを忘れないということ、貯めた知見を深めたいと思う探究心、それらは時にぶつかることがあっても、どれも同じ位大事にして生きていくしかない。時に矛盾を抱えながら、自らの内の葛藤も認めながら、われわれの「開き方」も、もっと上手になっていきたい。遅かれ早かれ死んでしまうのだ。今だけのゆらぎである。それもまた貴重なプロセスだ。あと何年かわからないが、みんなが死んでしまうまでの時間をどう有意義に過ごすか考えねばならない。

末尾になってしまいましたが、この、楽しいけど大変なプロジェクトを企画し実行した札幌の皆様にご尊敬と感謝の気持ちをお伝えすると共に、文章に考えをまとめる機会をいただき、心より御礼申し上げます。本当に、ありがとうございました。

「Collective P」について。

五十嵐淳(建築家)

「札幌市民交流プラザ1周年事業」の中のひとつの企画として、まちづくりプランナーである酒井秀治氏と建築家である僕との共同でテーマに取り組んでほしいとの依頼であった。

札幌市民交流プラザは今まで札幌市の都心部にはなかった公共的な芸術文化施設である。アートの展示スペースのほかに劇場や図書館、飲食などがある複合的な空間であり、上層部分には民間企業やテレビ局も混在している。札幌市は約200万人の都市でありながら、中心部に現代美術館がない稀な都市であった。近代美術館や劇場などはあったものの気軽に立ち寄れるようなパブリックスペースではなかった。このような背景があり札幌市民交流プラザへの期待は計画段階から市民の関心を集め、施設のあり方についての意見交流会なども開催されていたし僕も参加していた。

そのような期待の中で完成した市民のための居場所は、ホールなどのパブリック空間にテーブルや椅子・ベンチなどを積極的に配置することにより人で溢れ賑わう施設となり、図書館も座席は常に満席である。単体の美術館では実現できなかった市民の利用率の高い公共性を獲得した点においてとても評価できる場である。

提案を考えるうえで、札幌市民交流プラザは敷地であるといえる。そして「搬入プロジェクト」という要件がわれわれに与えられた。さらに施設の1周年を記念する企画である点が大きなテーマであった。建築に例えると「敷地」と「条件」となる。建築の設計に限らず、まちづくりにおいても敷地含めた現状リサーチと諸条件の解説から作業を始める。今回、僕ははじめて「搬入プロジェクト」の存在を知り、過去の資料やインターネットなどにより解説を始めた。すると、とても建築的なプロジェクトであることがわかり、発案者

の経歴を拝見することで、とても腑に落ちた。

僕は今では建築家などと偉そうに名乗ってはいるものの、もともとは実家の家業であった工務店の手伝いから設計を始めた身としては、余計にこのプロジェクトがある意味で身近に感じることができた。

ゼネコンなどの大手施工会社では工程計画から監理までをかなり厳密に実行する。なぜなら公共建築や巨大建築の現場では、トラブルやミスは絶対に許されないからである。しかし小さな工務店が請け負う小さな工事現場ではトラブルやミスが起こることがある。それはクライアントに迷惑をかけるようなトラブルやミスのことではなく、「搬入プロジェクト」が「醍醐味」と捉えているような出来事と似た出来事が、わりと頻繁に小さな現場では起こり得るのである。

例えば大きなガラスが予想より巨大で重く、職人が4、5人、さまざまなハプニングを乗り越えて窓枠までたどり着き設置したり、大きな梁や大きなテーブルが……というようなハプニングが起きたりするわけである。図面や模型で寸法を確認しつつ、モノの動きや労働者の動きをイメージしていても不思議と現場ではいろいろなハプニングが起こるのである。僕の苦い経験を紹介すると洗濯機のメーカー名と品番を事前に確認し図面で厳密に搬入検討をしていたにもかかわらず、設計の寸法をギリギリに攻め過ぎ、数cm施工が図面と一致していなかったため止むなく壁を一度壊し搬入後に再構築したことがある。さまざまな現場でのハプニングを経験してきたので、乗り越えたときの現場の雰囲気などは言うまでもなく素晴らしい。この「搬入プロジェクト」という「条件」を前提に「札幌市民交流プラザ」という「敷地」を読み解いていった。最初に述べたように札幌市民が待ち望んでいた公共性の高い文化施設が都心部に生まれた。

メインエントランスの風除室入口の自動ドア幅は

2.25m(有効幅2.06m)、高さ3mである。風除室の天井高さは5mあり、風除室を抜け13.5m奥に進むと天井高さは18mとなり、空間奥行きは70mの大空間となる。最終的な2階搬入設置場所は幅10.05m×奥行6.3m×高さ10.6mの空間である。施設南側には札幌市内でも有数の交通量を誇る北1条通りがあり、東側には石狩街道とよばれる交通量の多い通りがある。北側の通りも比較的交通量が多く、西側の道路は北から南への4車線一方通行道路である。

主に建物寸法と道路について述べたが、この条件を基に「搬入プロジェクト」での醍醐味を実現するための「物体」の「大きさ」や「形態」を考えてみた。断面の大きさは入口の寸法により想定は容易であるのと、過去の「搬入プロジェクト」で実践された形態によりイメージしやすい。建物周辺の歩道は広めで道路も十分に広い。道路使用許可等を得て巨大物体を振り回すことは可能である。風除室とその奥の13.5mほどの距離は5mの天井高さが続く。18mに比べると低く感じるが住宅2階建吹抜けくらいの天井高さである。18m天井高さの大空間でハプニングのような醍醐味を体験しようとする複雑な形態にした場合でも長さ25mから50mくらいは必要だと考えられた。過去の「搬入プロジェクト」でも体育館や大きな公共施設に搬入した例もあり、従来の「搬入プロジェクト」の方法でも醍醐味を実現出来ることは想像できた。さらにあえて市民交流プラザの狭い裏動線などからの搬入も考えた。それは地下から展示室や劇場へ搬入するルートである。

このように解釈を進めるうちにいくつかの違和感が生まれた。

著作権を完全放棄した「搬入プロジェクト」を、物体の色や素材や形態や寸法や搬入方法に多少の変化は起こるとしても、オリジナルの流れにそって実践することへの意味に対する違和感。

模型と図面により巨大な物体が建物の中に入ることを確認しているにもかかわらず、ハプニングなどの醍醐味を自ら演出しているように見えることへの違和感。これは建築現場でリアルなハプニングを幾度となく経験してきた僕には特に大きな違和感である。

ボランティアを募る場合、そもそもアートに興味がある人が集まるのは仕方がないのだが、アート好きな人

のための身内感のある小さなくくりでの世界観になることへの危惧。

ここでの違和感は「搬入プロジェクト」に対する否定的な意味ではない。むしろ著作権放棄により、まったく別のジャンルの作家が(今回の場合、建築家とまちづくりプランナー)、世界中の多様なコンテキストの中で、どのように「搬入プロジェクト」を解釈し、変化や刷新が展開し、新しい「搬入プロジェクト」が生まれるのかへの期待感のような感覚である。地球上の生物がそうであったように、多様なコンテキストにより多様な変化や進化を繰り返られるような状態。変化や刷新が起こったとしても「搬入プロジェクト」には人間の本能のある部分に働きかける根源的な解釈が含まれていることへの共感。

札幌市民交流プラザ1周年の企画としての「搬入プロジェクト」の別の形を見つけたいと考え始めた。より広く多くの市民に開かれた公共空間であることへの気付きと発見、そしてキッカケとしてのプロジェクトを模索した結果、次の具体的な事柄が発見された。

製作場所を市内へ分散配置し、作業風景を市民に広く見てもらうこと。分散製作したパーツを、公共交通機関と地下道等をつかい運ぶことで市民に広く見てもらうこと。札幌市民交流プラザに搬入し共同で組み立てる風景を広く市民に見てもらうこと。組み立てられた物体に市民に触れてもらうこと。解体後に8割の素材を土木資材として再利用し、2割を交流プラザ内に分散配置し家具として使ってもらうこと。小さなピースの集合体が生まれるイメージ。

これらの具体的な事柄は今回のコンテキストである「搬入プロジェクト」をベースとした発見であることは紛れもない事実である。「搬入プロジェクト」には人間の本能のある部分に働きかける根源的な解釈が含まれていると書いたが、今回の「Collective P」にはそれが間違いなく含まれていると考えている。つまり「Collective P」は間違いなく「搬入プロジェクト」の再解釈から生まれた。札幌という生態系とふたりの作家を通して生まれた、「搬入プロジェクト」の多様な形のひとつの枝の葉のようなプロジェクトであったと考えられる。